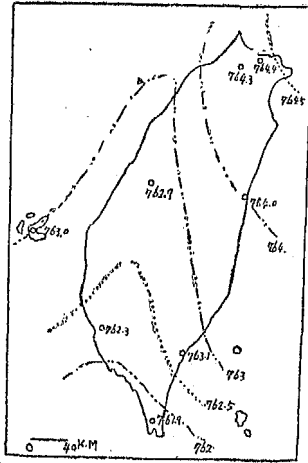


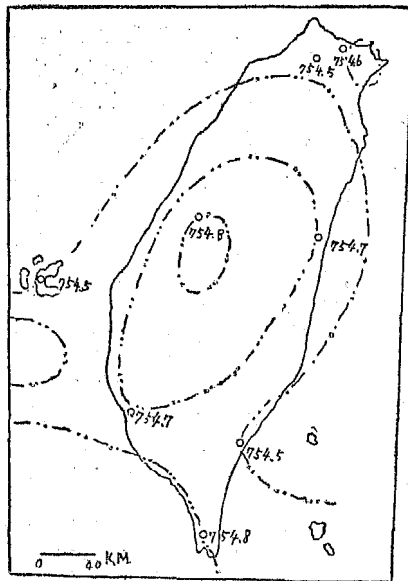
此の平均状態に於ける全島氣壓分布圖を作成
第三圖

六、七、八、月、平均氣壓及等壓線(數字ハ耗)



第四圖

すれば左の如き等壓線圖を得らるゝと思ふ。
六、七、八月平均氣壓及等壓線(數字ハ耗)



西遊夢

錄 (二十一)

瀧川規一

蘇國の部

【ロツホ・ロモンド周航】 インヅアスネイド (Inversnaid) の埠頭に立つて、思案に惑ふこと數刻、遂にロツホ・ロモン

ドを一周し、行く先の船着場に着く毎に埠頭で宿室の有無を聞かうと腹を決める。無謀なる大膽さではあるが今となつては如何ともする術がない。呼べば答へんばかりの對岸には連

山の麓が渚に迫り、山麓には汽車が走つて居る。ターベット (Turber) と云ふ對岸の埠頭まで行けば宿の心配は要るまいとは乗り合はした乗客の意見である。湖頭アルツルイ (Ard-It) を發して東下する船はインツアスネイドを纏て次にターベットに着く。船は中途にして湖水の最深部(六二二呎)を通過する。ロツホ・ロモンドが「底無し海」と稱せられて居る話はこの深部の存在から由來したのであると船員は説明する。

ターベット埠頭に着けば下船する者少數であつて、乗船せんとする者が埠頭に長き列を成して待つて居る。ターベット・ホテルは城閣然たる規模と輪喚の美とを兼ね備へた建築物である。時刻稍早過ぎたが、無宿者の悲哀に懲りて此處に宿を定める。汽車は蘇國の西海岸にある海港オーバン (Oban) まで直通し、ロツホ・ロング (Loch Long) の湖畔のアロカ (Arrochar) までは一哩半ばかりにて、これまた汽車で行くことが出来る。左手に聳ゆるは二千呎餘の峻峰ベン・ブレット (Ben Breachd) でありその山麓も亦湖畔に迫つて居る。右手に見えるは略同じ高さのベン・ノアロ (Ben Neoch) であり兩山相竝ぶが如く同じく山麓が渚に迫つて居る。ホテル前の庭に立つて眺むれば兩山とも初夏の夕陽を受けて全山紫色を呈して居る。宿の人の説明によれば眞盛りの「高地ヘザ」 (Highland heather) の花が全山を蔽うて紫の衣を被せて居るからだと言ふ。室の窓は靜な湖面を下瞰し遠近大小の島々

には樹木繁茂し、汽船は一抹の煙をたなびかせて走つて居る對岸の連峰は黒緑の濃さを窺ふが如く其の翠滴るが如くである。

ターベットの地名は「ボートの通路」(Boat Pass) の意である。大昔はこの地の地勢が水面下にあつてロツホ・ロングとロツホ・ロモンドとの二湖相通じてゐたと云ふ。昔は海峽であり今は兩立に挿まる山峽である。十三世紀に諾威王ヘイヨン (Hakon) が蘇國高地々方の侵寇を企て一二六三年の九月に一大艦隊をクライド入江 (The Firth of Clyde) に進めた。蘇國王アレキサンダ三世 (Alexander III) は冬期敵軍の行軍難を豫想して敵からの降伏勸告に返答を與へなかつた。諾威王は蘇國西岸の一大巨島マン (Man) の王オラフ (Ola) を將とし六十艘の船をロツホ・ロングに迦江せしめターベットを通過しロツホ・ロモンドに入つた。

沿岸は劫略と殺戮の爲めに只破壊の跡を留めるのみであり、ロモンド湖畔の住民は悉く山上に難を避けた。無人境を行く敵軍は遂に陸行スターリング (Stirling) まで進軍し、引き返へして湖を西に上つた。その間に一大暴風起りオラフの凱旋を待てる諾威王の軍船は陸に乗り上げた。その間に蘇人に襲はれた手薄の諾威軍は大敗し國王は身をもつて遁れたが遂にオーグニ (Ogryni) 島にて仆れた。爲めにマン島のオラフの掠奪も無効に終つた。ホテルにてはヤンキ靴を聞くことなく大抵は英人に非ざれば地方定期の休暇日に一日若く

は数日の閑遊を試みる蘇人である。

翌日船を待ちてロリアナン埠頭 (Rowardennan) に行く。
ベン・ロモンド (Ben Lomond) は湖面より高き二と三二〇
〇呎の高山であり、この埠頭よりリックザツクの登山隊を見
ること二三にして止まらなかつた。自らも雄心勃勃として登
山を試みたまは山々であつたが如何せん旅の前途を省みる時
斯る小山に預く愚を敢へてなすことを許さなかつた。

ホテルの給仕男の説明は懇切を極めて居る。曰く、ロリア
ナン・ホテルの門口の向ふから山道をとつて只一筋に芝生の
山の背に先づ出で、左に折れて背を横きり高臺に出でよ。高
臺から右手に登り山の背の端まで行き左手に折れ直路すれば
頂上に至る。全行程僅か五六哩である。處々に方錐形の石塚
(Cairn) があり石塚は石英 (quartz) にて建てられ居るが故
に白色にして目標に適す。頂上の眺望は群山の遮るものなく、
世界に名高き瑞西のサン・ゴータド (St. Gothard) グリムセル
(Grimsel) 及びフルカ (Furka) の山頂より歐洲を下瞰す
る時よりも以上の眺望がある。ロツホ・ロモンド湖上の大小
無数の島嶼は碧水に浮ぶ小綠點となり南にはエナンバラ市の
郊外に聳ゆるアース・シート (Arthur's Seat) を遙に望み、
グラスゴ市、ラナーク (Lanark) の郡、クライド河畔の谷、
チント (Tinto) 河の谷、カンバランドの連山を指呼の裡に數
へ西方にはアンフリュ (Renfrew) ホブ (Ayr) の二郡、クラ
イドの入江、アラン (Arran) ユネート (Bute) の二大島、

更に遠く大西洋と愛蘭の海岸を眺め、東にはフォルス河 (The
Forth) ロミアン (Lothian) 三州の平原を眺め、近くはスタ
ーリンガの城を見る。眼を北に轉すればグランヒア山脈
(Grampians) の山岳重疊を見そのうちの高峯には頂ける白雪
を見る。近くはベン・クルアカン (Ben Cruachan) の山が見
る人を威嚇するが如く遠くはベン・ネヴィス (Ben Nevis
の山は雪を頂いて控え湖頭にはベン・フォリック (Ben Vor-
lich) 及びグレン・フロック (Glen Falloch) の丘陵起伏
を見る。蘇國高地に来る者にしてこの展望を樂まずして歸
るは至極遺憾である。湖上の美人の島を守護して巨人の如く
立つ山岳の光景を一望の下に集めるはベン・ロモンドの山嶺
に若くはない」と云ふ。旅客の秘めたる感じはこの説明に満
腹して登山の渴望を起し得ないことであつた。

黒衣白襦衣の三十四五歳の給仕頭は食事中特に稱揚これつ
とめ宿の婦人登山客の女軍の長たれと余にすゝめる。
躊躇決することなく食後廊下に佇み居れば廿歳ばかりの蘇國
嬢までがすゝめる。「明日九時より出發するのだ。ターベツ
ト・ホテルでお前の話を聞いたので必ず一泊して登山するも
のと思つてゐたのに」と云ふあまりにすゝめられると何とな
しに氣味悪く遂にこの宿をさつさと引き揚げた。故國に歸つ
て回顧する今日餘りに魔病なりしことに詮なき悔みを感じる
のである。

次の埠頭は對岸のルヌ (Luss) である。埠頭に近づくと

長は乘客一同に向つて地質の説明をなす。この附近一帯の地質は雲母片岩が分解して豊饒なる土壌を作り緑草の繁茂を見、日光に當る處は羊齒太く茂り日蔭にては羊齒は細くして丈け長く岩蔭は綠苔と地錢とによつて蔽はれ蘇國高地の風景佳絶の地は悉くこの地質よりなり湖水にてはロツホ・オー (Loch Awe) / ロソホ・ロング (Loch Long) / ロソホ・グイ (Loch Gai) / ロソホ・テイ (Loch Tay) / ロソホ・サト (Loch Katrine) / 山 (Loch Katrine) / ベン・ヴェヌ (Ben Venue) / ベン・レディ (Ben Ledi) / トロサックス (Trossachs) / ベン・ロモンド (Ben Lomond) 等がその麗しき綠衣と清き溪流とを以て旅客の眼を慰めるは偏に雲母片岩 (mica-schist) の賜物である。諾威はフィオルド (Fjord) の絶景、瑞西はルチエレン湖 (Lake Lucerne) 湖岸の景勝と雖もこれに及ばずとて船長は誇り顔である。

ルスは湖岸の一寒村である。二時間ばかり船を棄て、村の詩人ジョン・ウォーカー (John Walker) の記念碑を見に行く。詩人が英語蘇語ゲール語にて作つた短詩 (Poems in English, Scottish and Gaelic on Various Subjects) は今日地方の人々を除いてはその存在すら認められないが、畫家サア・デヴィッド・ワイルキ (Sir David Wilkie) の筆になつた「丘」 (The Hill) と題する繪―搖籃内の赤ん坊を羊の番犬 (collie) が神妙に見護つてゐる繪―が優秀の作として英人間に喧傳されるに従つて、この繪の畫かれた家として詩人の名が旅客に吹聴

されて居る。家あるが故人貴しの一例である。更に驚く可きことは詩人ジョンに一人の娘メリ (Mary) が居り大英百科辭典 (Encyclopaedia Britannica) の全部を讀み了せその大半を覺えて居たと云ふ逸話である。感心する者も感心する者だが、何れの國を問はず田舎者や無教育者は感心する程のことでも無きことを無暗に感心することがある。さうした一面の笑話を傳へるものとして見ればこれも面白い。昔公腰掛け石に無上の興を覺ゆるの亞流である。

ルスの教會はカラン・マケアンソング (Carr-na-Chessaig = Cairn of St. Kessig) と云ひ、殉教者のケソツツの名を以つて教會に附した。殉教の後その遺骸を香草に包み上人の本國に送り還へしたが、その芳草 (ゲール語で L. U. S.) が地に根つき繁つたので地名となつたと云ひ、或は地方豪族の婦人の棺の上に蒔いた百合花 (Heur-de-lys) が墳墓の上に生え茂つたのでリスから轉訛してルスとなつたと云ふ。何れにしても迷信の種類としては陳腐なものであるが、この地にあつてはこんなことまで興味の一要となる。

ルスの埠頭を去ること暫時にして大小の鳥輦が一眺のうちに集る。インチ・コナカ (Inch Connachan) の鳥は船が埠頭近くの岬を曲れば直に現れ、續いてインチ・タバナツハ (Inch Tavanach) を左に見て岸傳ひに船はバロツク (Balach Phe) に向つて進む。乘客の多くは歸路を急ぐ「依日歸り」の地方人である。インチ・ムリン (Inch Murlin) の鳥を見る頃

になると甲板に群れ居る男女の客は誰が音頭を取るともなく蘇國の地方歌を唱ひ始め唱和の聲と共に足どり面白く男女抱擁の舞踏を演じた。簡單なるワン・ツ・スリの痴歌を歌ふに始まり終には亂舞となるまで甲板は大騒である。異國の旅客にまで一團に強ひて加入せしめる。興稍醜ならんとする頃船長の命令によつてはたと禁止さる。命令の傳はると共に笑聲どつと起り今まで抱擁亂舞の男女はハンチに腰を下ろし何處はめ類をしてすましてゐる。琵琶湖周遊客には酔ひどれの亂行痴語を見ることがあるがこの船長の整理權の偉大なるには感心せざるを得なかつた。彼等の歌彼等の詠を耳にする地方語の研究者にとつてこよなき機會であつた。

右岸には美しき庭と茂れる森とを周圍にもつ館がいくつとも船の進むに従つて姿を現はす。アーデン(Arden)の館と稱せらるゝ建物の上手に溪流が湖水に流れ込むのが見える。鱒釣りに名高く蘇國の二豪族マックグレンテル(Macgregors)とコフーン(Colquhouns)とが、七世紀の初に流血の慘を呈して互に虐殺戦をなした古戰場として有名なフルイン河(The Fruin)と同じ名の谷(The Glen of Fruin)がそれである。サブ・ウカータ・スコット(Sir Walter Scott)が作つた有名な舟歌ロアリック・ツイック・アルハイン・ヂエ(Rodolph Vich Alpins Dhu)に歌へる「吾がバロツクの曲はフルインの谷を繞り」と云ふは今日前に見る谷と流である。バロツク埠頭に近づく頃に右岸に一郭の館が見える。十八

世紀の小説家スモレット(Smallet)がその家から出て今日も同家の所有となつて居るカメロン・ハウス(Cameron House)がそれである。スモレットの小説は今日も讀者のあることを知らぬが、今日吾々が讀んでも面白い讀物である。その一小説ハムフリ・クリンカ(Humphrey Clinker)の人物トピアス(Tobias)が一日訪客として滞留したのもこの家であり、文學史上十八世紀の大立物サムエル・ジョンソン博士(Dr. Samuel Johnson)とその傳記作者ボスウエル(Boswell)とが蘇國高地旅行の歸途立ち寄つたのもこの家である。

バロツクの埠頭ではグラスゴ市行きを待つて汽車は黒煙を吐いて居る。船に居残つた者は只一人の現筆者である。待つこと三時間ばかりにて漸く船はバルマ(Balmaha)に向つて進む。

右岸に見ゆる筈のボツリツヒ・カスル(Bourrich Castle)の城は生え茂れる森に隠れて見えす。十六世紀の蘇國文豪サブ・ラインド・リンディー(Sir David Lindsay)の傑作として讀まる「スクアア・メルドラムの歴史」(Historie of Squyer Meldrum)中の記載によれば「女性(Mistress Haldane of Glenegles)が包圍の暴兵マクマクラーン(Maclarlans)の一族を撃退したと云ふ古城である。今日では印度成金の紳商の別荘となつて居る。成金が城を買つて家となす。考へやうによつては多少の興なしとせずである。

西上する旅客の日に最初に見える比較的大なる島はイン

チ・ムリン (Inch Murrin) であり全島森林をもつて蔽はれ鹿狩の獵場となつて居ると云ふ。

船より右手に遙かに僧院が見える。スコットが傳奇小説ロブ・ロイの大半を書いたと云はるゝ家が僧院附近にある。後方の山はダンクリン (Dun-Crune) と云ひ魔女の丘 (Hill of the Witches) として迷信の本場である。魔女若くは巫女と呼ばれるゝ女性に關する迷信は近代科學の發達する迄セルト民族が殊に過信してゐたもので英蘇到る處にウィッチの傳説を聞き米國に於てすら輸入のウィッチの迷信がある。

バルマに到りルス (Luss) に再び歸るまでは一群の大小の島々を一周する。海湖に島を見ることが何故に斯く快感を吾々に與へるか。碧水に綠樹の色の配合が然か快感を興すか、水陸と云ふ單なる對照が感情を誘發するか。ムリンの島 (Inch Murrin) の鹿苑のことは既に述べた。プリムローズの花咲くタノ島 (Cre-inch) / トール (Thor) の神に縁をもつトル島 (Tor-inch) / ブカナン (Buchanan) 豪族のスローガン (Slogan) が由來するクニア島 (Chair-inch) / 昔セルト民族の尼院の跡があつたが故に老婆の島の義を有するカイリアツク島 (Inch Caillach) がある。

カイリアツク島にはブカナン族の人々の墓地がありスコットが湖上の美人中にユー (Yew) の樹枝がアルバイン豪族の墓に陰を作ると云つたのはこの島のことである。島端を離れると共に船はバルマの埠頭に着く。

バルマは山村の工業地であり染色業に使用する色留料として木醋酸を製造する工場が高き煙突より煙を吐いてゐる。この附近の森林には材料の木が多量に産出すると云ふ。町の背後に峠がある。高地人が低地人飼養の著牛を掠奪に出かけるには必ずこの道をとるとスコットが歌つたのはこの場處である。

埠頭を去るとまたも島の連鎖である。ファッド島 (Inch Fad) が最初に左舷に見える。バキンチ (Buckinch) の小島には「倫敦誇」と云はるる薔薇に似た花、谷百合、躑躅などの花が今を盛と咲いて居る。英國にては百花期を一にして開花する。季節を追うて花卉に見馴れた眼には珍奇な感じがする。豪怪の賊ロブ・ロイが出没したと稱せらるゝロネイグ島 (Inch Lonaid) が吾々を迎へる。船長は地質學的な説明を客に試みる。抑もロツホ・ロモンドの出來たのは結氷時代の氷の浸蝕作用によつて湖底の盤層が出來た。その證據にはロネイグ島に見ゆる岩壁は化石含有の土砂と海泥との上に漂石粘土が積うて居ると云ふ。科學者ならぬ船客は只船長の説明を默然傾聴するのみである。次の圓形の島はクルイン島 (Inch Cruin) であり、泥炭の如き地質の爲めに黒く見える島は、モイン島 (Inch Moine) 即ち語義より苔島である。古城蹟を僅に留めて居るガルブレイス島 (Inch Galbraith) がある。右舷に見ゆる本土の地角にはロスサユ (Rossadh) の箇跡が眼鏡を借つて漸く見える。スコットの詩に屢其名を聞く豪族コフーン

Colquhoun)の本城である。樅と檜の自然樹の生ひ茂るコナカン島 (Inch Conachan) には蝨が居つたとて名物になり、この湖水の三不思議の一に數へられ、蝨は「鱈無き魚」と呼ばれて居る。ダバナ島 (Inch Tavnach) は昔セルトの寺があつたとて一名坊主が島 (Monk's Isle) と云ふ。ロツホ・ロモンドの多島海を漸く一周して船はルス (Luss) 埠頭に歸る。ローテナン及びターベツト兩埠頭に立寄り湖頭のアルヅルイ (Ardur) まで船は午後の陰暗なる空の雲と疾驅を競ふが

講話

造岩鑛物とその顯微鏡識別法 (一)

小川 琢治

一、緒言

前稿に岩石學用顯微鏡の使用法に就いて略説した。次に岩石薄片に現はれる造岩鑛物を識別する方法をワインシェン氏の造岩鑛物篇(第三版)に基いて略説する。

造岩鑛物とは岩石中に含まれた一定の化學成分を有し箇體の鑛物を成すもので、一般の鑛物中の極めて小部分にして、種類に於いては少數で地殻を構成する物質としては多量である。故に之を識

如く只僅か數人の客を乗せてひた走りに走る。船くりも足早の汽車は左岸に蕪々の響を山岳に蕪かせて吾々を尻目にかけて走り去る。アルヅルイ埠頭に着いた頃は夏の長き黄昏の時刻であつた。二十歳ばかりの青年は埠頭に吾を待ちて、アパフォイルの宿に居た日本人はお前かと聞く。何故に知れるやと問へば逡巡の報告があつたとて正直な返事をする。宿室のあることを聞いて一安神の息を吐く。